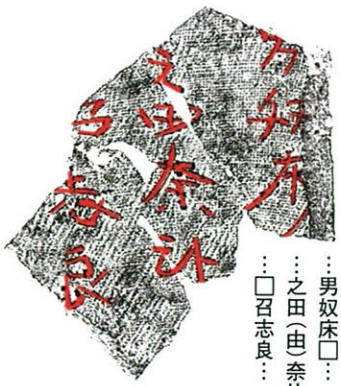
出土した遺物

瓦葺きの建物がほとんどなかった奈良時代、そびえ立つ国分寺の荘厳な姿に人々はさぞかし驚いたことでしょう。

瓦は葺き替える必要があるため、様々な時代の瓦が大量に出土しました。特に軒先で使われる軒瓦は、時代や地域によって模様が異なるため、当時の様子を探る手がかりになります。



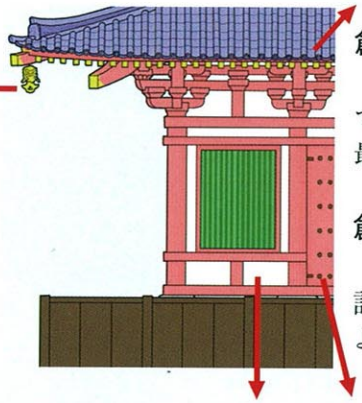
文字瓦

文字の記された瓦を総称して文字瓦と呼びます。残念ながら前後がかけているため内容は不明です。

風招

残存長6.7cm、厚さ2mm。

軒先に吊るす風鐸の舌の部分に下げます。風を受け、音を奏でる仕組みになっています。



創建期の軒丸瓦

花びら8枚の蓮華の模様です。全ての堂塔で使用され、軒丸瓦の中で最も多く出土しました。

創建期の軒平瓦

唐草模様の入った軒平瓦です。上記の軒丸瓦とセットで使われていたようです。

塼

粘土を板状にして作るレンガ。建物の壁や床などに用いられました。（長さ27.5cm、幅22.1cm）

壁土

建物の壁土の一部。表面には白色土が残っています。

建築金具

使用された釘や飾り金具です。右奥は唄金具という釘隠しです。（最大長11.3cm）

記号の刻まれた瓦

奈良時代の平瓦の一部には、一・十・○・上など計10種類の文字や記号が刻まれていました。

これらの記号は、瓦を製作した集団が作業量を把握するために、一定の枚数毎に記したのでしょう。

筆跡などから、同じ文字を複数の人物が記したことが分かっており、多くの人が瓦の製作に携わっていたようです。

文字瓦の拓本

（左から）「八」、「十」、筆跡の違う「上」２点